

# 平成 27 年度 ホシザキ野生生物研究所

## 研究報告会プログラム・要旨集

日時：平成 27 年 10 月 27 日（火）、11 月 1 日（日）

※両日とも 14 時 00 分～16 時 30 分、同じ内容にて 2 回開催

会場：出雲市民会館 3 階 301 会議室

主催：公益財団法人ホシザキグリーン財団

後援：島根県，出雲市

プログラム：

（鳥類分野）

出雲市の砂浜海岸とレッドデータブック掲載種であるシロチドリ

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

（昆虫分野）

隠岐諸島で発見された水生甲虫の新種について

林 成多（ホシザキ野生生物研究所）

（植物分野）

雲南市木次町「ふるさと尺の内公園」および

その周辺の特徴的な植物

三浦憲人（ホシザキ野生生物研究所）

（水生生物分野）

宍道湖流入河川に生息する標準和名の消えた

ヨシノボリ属魚類について

佐々木 興（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

（環境修復分野）

主要魚種の食性から見た宍道湖中海の環境

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

## 出雲市の砂浜海岸とレッドデータブック掲載種であるシロチドリ

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* は、ユーラシア大陸やアメリカ大陸などに広く分布し、日本においてもほぼ全国で見られる。しかし、近年、個体数の減少が指摘されるようになり、2012年に公表された環境省の第4次レッドリストには絶滅危惧Ⅱ類として新たに加えられ、同省が編纂したレッドデータブック（2014）に掲載されている。

本種は、島根県においても一年を通して見られ、おもに砂浜海岸や河口部の砂礫地などに生息しているが、県のレッドデータブック（2014）では準絶滅危惧に選定されている。しかし、県内の生息数の推移などの情報は少なく、特に県内全域を対象とした記録は見あたらなかったことから、2011年から本種の繁殖期にあたる5-7月に県内各所の砂浜海岸を踏査して実態調査を行ってきた。

その中で、調査地で繁殖する可能性が考えられたつがいの数は、その砂浜の長さと同程度であると予想される結果が得られており、県内の砂浜海岸の総延長に対して概ね2割程度を占めると考えられる出雲市の砂浜は、県内における本種の生息地として重要なエリアと思われた。実際、長く連続する砂浜を有する出雲市の海岸においては、それに見合う生息数が確認されている。また、同地には広い砂浜を伴う砂丘地形や幅の狭い砂浜などのほか、人工護岸や大小の河口部に接する砂浜などさまざまなタイプが見られる。また、浸食や堆積による汀線の変化が見られるところもあり、人の利用や作業などが比較的よく入る場所が含まれるなど、砂浜海岸における本種の生息状況とその推移を継続的にモニタリングすることで、本種の生息地保全に有益な情報が得られると考えられた。

本報告では、2011年に出雲市が実施している自然環境調査として行った結果のほかに、2012年から2015年まで行っている独自の調査結果をあわせて紹介し、現時点で考えられる本種の生息状況について報告する。



シロチドリ（左♀/右♂；出雲市海岸）

本発表の内、2011年の出雲市の海岸における調査結果は、出雲市「平成23年度自然環境調査報告書」によります。

## 隠岐諸島で発見された水生甲虫の新種について

林 成多 (ホシザキ野生生物研究所)

隠岐諸島に生息するヒメドロムシ科の一種が新種であることが判明し、サンインヒメツヤドロムシ *Zaitzeviaria sotai* Hayashi et Yoshitomi, 2015 として記載を行った。この新種の発見から記載までの経緯や、現在解明中の生態について報告する。

この新種は、ヒメドロムシ科のヒメツヤドロムシ属に分類されるが、発見当初は同属のマルヒメツヤドロムシと区別されていなかった。隠岐産の個体について、ミトコンドリア DNA の塩基配列に基づく分子系統解析（類縁関係を推定する手法）を行ったところ、マルヒメツヤドロムシとは異なる種である可能性が高いことが判明した。そこで、オスの生殖器を含めて形態について詳しく調べてみたところ、形態でも区別できることを確認した。

新種として正式に認められるには、昆虫の場合は国際動物命名規約に従って、ラテン語で綴った学名、基準となる標本（タイプ標本）とその保管場所の設定、種の特徴などを明記して、学術雑誌などで発表する必要がある。今回の新種は学名をザイツェヴィアリア・ソタイ（種名は DNA 分析を行った曾田貞滋博士にちなむ）とし、基準となる標本は隠岐諸島の中ノ島産（マルヒメツヤドロムシが生息しないため、混同する心配がない）とした。基準となる標本は共同研究者である吉富博之博士の所属する愛媛大学ミュージアムに保管されている（日本有数の昆虫標本のコレクションがある施設）。

新種の特徴が判明したので、改めて山陰各地の標本を調べてみたところ、山陰本土側の島根県や鳥取県にも生息していることは判った。いずれも小規模な里地の河川や水路が生息地であり、これまでマルヒメツヤドロムシと混同されてきたため、その存在が長い間知られていなかったことになる。山陰地域以外の分布は不明であるため、今後調べていく必要がある。



新種サンインヒメツヤドロムシ

## 雲南市木次町「ふるさと尺の内公園」および

### その周辺の特徴的な植物

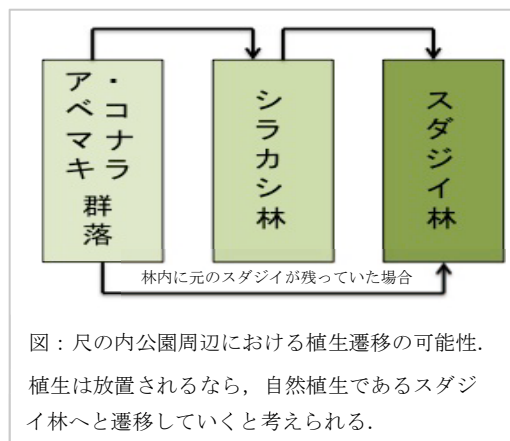
三浦憲人（ホシザキ野生生物研究所）

「ふるさと尺の内公園」（以後、尺の内公園と記す）は、野生動植物に生息環境を提供するための整備も行っている。また、尺の内公園をとりまく丘陵地があり、どちらも野生動植物の生息場所として一体的な調査を行う必要がある。

尺の内公園と丘陵地の植物に関して、2013年から2014年にかけて植生と植物相の調査について報告する。

2013年の調査から丘陵地の植生図を作成したところ、大部分にアベマキ・コナラ群落とスギ・ヒノキ植林が分布していた。そして、丘陵地の南東部にはシラカシが優占したシイ・カシ萌芽林を確認した。杵村（1998）は、この地域の気候や海拔高度などから、自然植生がスダジイ林を優占種とする照葉樹林であると考えている。そして、アベマキ・コナラ群落やスギ・ヒノキ植林は、このスダジイ林の代替植生の二次林であるとしている。また、コナラ林分に伴っているシラカシが林冠を構成し、シラカシ林が形成されていき、そのまま放置されるものであれば、相当な年数を経てスダジイ林へと遷移が進むと考えている。今回の植生調査の結果では、シラカシが優占したシイ・カシ萌芽林を確認することができた。しかし、スダジイ林への遷移を確認するには相当の年月が必要であると思われる。今後の遷移については永久コドラートを設置し、毎木調査を継続的に実施することで、さまざまな知見を蓄積することができると考えられる。

次に、高等植物（シダ・種子植物）を対象とした植物相調査から、700分類群を確認した。この中には照葉樹林構成種であるヤブツバキ・ヒサカキ・ヤブコウジなどを多く確認することができ、スダジイ林の組織的痕跡を強く持つと考えられた。これらの調査の結果からは、尺の内公園およびその周辺の植物は出雲市および雲南市にきわめて一般的に見られる植物が分布していることを示しているが、つまりそれは、出雲市や雲南市の一般的な自然を調べる上で、尺の内公園の調査が大変重要であることを示しているといえる。



## 宍道湖流入河川に生息する標準和名の消えた

### ヨシノボリ属魚類について

佐々木 興（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

河川に生息するスズキ目ハゼ科魚類の中で、もっとも普通に見られるのがヨシノボリ属魚類であり、島根県には7種類が生息するとされていた。このうち宍道湖に流入する河川にはオオヨシノボリ、カワヨシノボリ、シマヨシノボリ、ゴクラクハゼ、トウヨシノボリの5種類が生息している。しかし、そのうちのひとは現在、標準和名が消えた状態である。

トウヨシノボリ *Rhinogobius* sp.OR は沖縄県を除く、全国の河川に生息するヨシノボリ属魚類である。繁殖期を迎えたオスの尾びれの付け根が橙色に染まることから付けられた和名であるが、各地での変異が大きく、これまで橙色型、偽橙色型、宍道湖型、縞鱗型の4つの型があるとされていた。しかし、近年の研究によって宍道湖型以外の型の中から新たな種類と思われるものが分類され、新しい標準和名がつけられた。その結果、トウヨシノボリという和名、およびそれぞれの型を残す根拠が曖昧になり、2013年に発行された「日本産魚類検索全種の同定第Ⅲ版」でトウヨシノボリという和名は消されることになった。

トウヨシノボリ宍道湖型は、宍道湖に流入する河川にも生息している。今回の結果により、宍道湖自然館周辺で採集されるトウヨシノボリ系魚類は、本来であれば「ヨシノボリの仲間」と標記しなければならない状態である。

今回の発表では、宍道湖に流入する河川に生息するヨシノボリ属魚類の紹介にあわせ、この和名消失の経緯とその後の混乱、そして今後の課題などについても紹介する。



トウヨシノボリの体色の変異

## 主要魚種の食性から見た宍道湖と中海の環境

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

宍道湖と中海を行き来し、かつともに多く生息する魚種（6種）の食性から両水域の餌環境を探ってみた。（スズキ・コノシロ・ボラ・サッパ・ヒイラギ・マハゼ）結果、宍道湖は利用される餌生物の種類数が少ないのに対して、中海はより多くの種類が餌として選択されていた。

宍道湖では、カイアシ類、ケイソウ類、アミ類、小型巻貝が多くの魚に利用されていた。

一方、中海では、カイアシ類とケイソウ類は共通して多かったが、他にヨコエビ類、二枚貝及びそのプランクトン幼生、多毛類、コツブムシ等の底生動物が利用され、食性の幅が広がった。

しかし、アミ類に関しては、宍道湖に比べて格段に少なかった。

アミ類の存在は、それを利用する魚が多く、もともと多く生息していた中海の生態系にとって、大きな影響があるものと推測される。

また、これらの魚の餌生物は、両水域共に湖底とその直上に生息するものが多く、高水温期に広がる湖底の貧酸素の影響を強く受けるものと思われる。



アミ類（イサザアミ）

MEMO

「平成 27 年度 ホシザキ野生生物研究所 研究報告会 プログラム・要旨集」

発行 公益財団法人ホシザキグリーン財団 ホシザキ野生生物研究所

〒691-0076 出雲市園町 1664-2

TEL (0853)63-7878/ FAX (0853)63-0987

©公益財団法人ホシザキグリーン財団 無断転載を禁ずる

※本資料は平成27年10月27日・11月1日に出雲市民会館にて行われたホシザキ野生生物研究所研究報告会のプログラム・要旨集です。本資料の公開は、当財団および研究所の活動や実績を紹介することを目的としています。転載や引用を希望される場合は、ホシザキ野生生物研究所までお問い合わせください。